

スポーツ・イベントと「ナショナルなもの」

—長野オリンピック開会式における「日本らしさ」の表象—*

阿 部 潔**

1. メディア・イベント/ナショナル・イベントとしてのオリンピック

「メディア・イベント」としてのスポーツ

周知のように、オリンピックは4年に一度開催される世界規模のスポーツの祭典である。それと同時に、オリンピックがアメリカのテレビ・ネットワークに代表される放送メディアと深い関わりを持つお祭り＝イベントであることも、現在では衆目の一致するところである。つまり、今ではオリンピックはただ単に純粋なスポーツ競技会であるだけでなく、メディアの諸作用と渾然一体となった「メディア・イベント」として、私たちの前に立ち現われているのだ (Spa, Rivenburgh, Larson, 1995)。

こうしたオリンピックに代表されるスポーツとメディアとの深い関わりについては、これまでにさまざまな立場から議論が交わされてきた。例えば、今日のアマチュアリズムはどうあるべきか。スポーツの商業化はどのような影響をもたらすのか。スター選手は企業の広告塔になってしまっているのではないか、などなど。スポーツ競技に対するメディアの影響が高まっていくなかで、こうしたコマーシャルの台頭に対する警鐘が各方面から鳴らされている。

しかしここでは、スポーツとメディアとの関係をめぐる規範的な議論には踏み込まない。本稿では、スポーツとメディアとが密接に関わり、スポーツ・イベント自体がひとつのメディア・イベントと化している現在の状況を所与としたうえで、そこにおける「表象をめぐる闘争」について考えていく。メディア・イベントとしてのスポー

ツを通じて、どのような価値観や理念が唱えられているのだろうか。そうしたメディアを通じた表象は、どのような政治的・歴史的コンテクストにおいて成立しているのだろうか。そうした表象を、観衆や視聴者はどのように受け止めているのだろうか。こうしたメディア・イベントとしてのスポーツを取り巻く「表象のポリティクス」を読み解いていくことが、本稿の目的である。

オリンピックという饗宴の場

オリンピックをめぐるのは、アマチュアリズムに対するプロフェッショナルリズムやコマーシャルリズムの高まりを危惧する声、近年とみに高まってきた。多額の放送料をめぐるIOC (国際オリンピック委員会) と各国メディアとの関係が、オリンピックのあり方そのものに影響を与えること (例えば、開会式やマラソンなど人気種目のスケジュールが、アメリカの放送局の望む時間帯に設定される) への批判や、プロ選手の参加によってオリンピックがスポーツ関連企業の広告・宣伝の場としての性格を強めていく傾向への疑問などが提起されている。こうした傾向はなにもオリンピックに限らず、現在のスポーツ全般に共通するものである。だが、「アマチュア・スポーツの世界的祭典」と謳われるオリンピックをめぐる、ことさらにアマチュアリズムとプロフェッショナルリズムやコマーシャルリズムとの拮抗関係が顕在化することは、当然といえば当然である。なぜなら「真のスポーツとは、どのようなものか」とか「真のアマチュアリズムとは、いったいなにか」というスポーツそのものの理念こそが、オリンピックでは重要だと看做されているからである。つまり、オリンピックという場は、スポーツ祭典

*キーワード：オリンピック、メディア・イベント、ナショナルなもの

**関西学院大学社会学部助教授

の場であると同時に、スポーツをめぐる理念が繰り上げられる饗宴の場でもあるのだ。

こうしたスポーツの理念をめぐる饗宴は、開会式や閉会式において、とりわけ顕著に繰り上げられる。開・閉会式は、それぞれに競技のはじまり／おわりを境界づける儀式＝セレモニーにほかならない。これまでのオリンピックの歴史を振り返れば明らかのように、各国選手団の入場行進を交えた儀式としての開・閉会式では、スポーツをめぐるさまざまな理念が演出されてきた。

さらに、ここで注目すべきことは、そうしたセレモニーを通じた理念の表象が、狭くスポーツに限られることなく、より広く文化／歴史／政治に関わっている点である。そこには、スポーツ自体を取り巻く経済や政治といった社会の姿が現われている。その点で、オリンピックの開・閉会式には、普遍的なスポーツ理念と同時に、それぞれの時代や社会を特徴づける理念が読み取れる。本稿で注目するのは、こうしたオリンピックにおいて表象される時代や社会の姿にほかならない。

コスモポリタニズム／ナショナリズム

それでは、開・閉会式というオリンピックのセレモニーにおいて表象されるスポーツ以外の理念とは、具体的にどのようなものなのだろうか。まず思い浮かぶのは、「友好」や「相互理解」という理念である。スポーツ競技を通じて異なる民族・国家に属する人々が交流の場を持ち、互いの文化について理解を深めていく。こうしたスポーツ競技を通じての友好／相互理解という理念は、近代オリンピックの歴史において重要な位置を占めてきた。オリンピックという場では、自民族／自国家／自文化の枠を超えて、友好と理解を「世界」へと広げていくことが理念として掲げられてきた。それは、近代オリンピックを特徴づける「スポーツを通じたコスモポリタニズム」にほかならない。

しかし同時に、こうしたコスモポリタニズムと並行して、オリンピックには「スポーツを通じたナショナリズム」の影が常に付きまとってきた。第二次世界大戦前のドイツでナチス主導のもとに開催されたベルリン・オリンピック（1936年）は、「スポーツを通じたナショナリズム」の典型

であった。また戦後においても、高度経済成長へと邁進していた日本で開催された東京オリンピック（1964年）は、当時の日本にとって国の威信をかけた重要な国家行事（ナショナル・イベント）として受け止められていた。

このようにオリンピックは表向きの理念としてコスモポリタニズムを標榜しつつも、他方でナショナリズムを発揚する場として大いに利用されてきた。つまり、近代オリンピックをめぐる理念には、コスモポリタニズムとナショナリズムとの拮抗関係を見て取ることができるのである。それでは、こうした理念の二重性は、現在のオリンピックにおいて、どのように位置づけられているのだろうか。

結論を先にいえば、こうした理念の二重性は、現在のグローバル化の進行のなかで、より複雑な様相を呈していると考えられる。具体的にいえば、従来のように単純な「コスモポリタニズムかナショナリズムか」との二項対立ではなく、「コスモポリタニズムもナショナリズムも」という二項共立として、オリンピックをめぐる理念が唱えられている。そこでのナショナリズムは、必ずしも他民族／他国家／他文化を否定するものではない。むしろ、コスモポリタニズムの立場からそれらを承認するそぶりを見せながら、同時に自民族／自国家／自文化の独自性や優越性を謳いあげるのである（阿部 [2000]）。近年のオリンピックをめぐる理念の表象は、こうした「グローバル時代のナショナリズム」の契機を多分に含んでいる。逆にいえば、オリンピックのセレモニーをつぶさに見ていくことで、グローバル化が喧伝される現代における「ナショナルなもの」の姿を、明らかにすることができる。

以上に述べたような問題意識に基づき、以下では1998年2月に開催された長野冬季オリンピックの開会式を主たる題材として、そこにおいて「ナショナルなもの＝日本らしさ」がどのように表象され、人々にどのように受け止められたかについて考えていく。

2. 長野オリンピック開会式：「日本らしさ」の強調と「世界」との繋がり

開会式をめぐる対立：官僚主義か公開・参加か

98年冬季オリンピックの開会式は、2月7日に南長野運動公園多目的競技場にて開催された。当地の時間で午前11時から始まる異例の「昼間の開会式」となった。その主たる理由は、最大額の放映料を払うアメリカの放送局に都合の良い時間帯に、開会式が設定されたからである。この点に既に、オリンピックがメディア・イベントと化している現状が如実に表われている。

長野オリンピックの開会式は、『劇団四季』の代表として知られる浅利慶太を総合プロデューサーとして、シニア・プロデューサーに萩元晴彦、演出・映画監督に今野勉、イメージ監督に新井満、音楽アドバイザーに小澤征爾をそれぞれ迎えるという、豪華な布陣のもとで企画・立案・開催された。

ところで、オリンピック開会式をどのように演出するかは、従来から厳格な秘密主義のもとに置かれていた。それゆえ観客／視聴者の多くにとって、開会式当日にならなければ「なにが飛び出すか」は分からなかったのである。こうした秘密主義を徹底する理由は、事前に開会式の内容が知れ渡れば、人々の関心が低下し、テレビ視聴率が下がることが危惧されるからである。そうした事態は、テレビ放映料がIOCにとって大き財源になっていることに鑑みれば、極力避けるべきものである。

しかしながら、長野オリンピックの場合には、早くも一年前に浅利をはじめとするプロデューサー・グループは記者会見を開き、開会式をどのようなコンセプトのもとに演出するかを公開してしまった（今野 [1998]）。その結果、開会式において「日本の伝統」が主たるテーマとして演出されることや、小澤征爾の指揮のもと五大大陸を繋いでベートーベンの『歓喜の歌』が演奏されること

は、マスメディアの報道を通じて開会式前に知れ渡っていた。こうした「公開主義」をとった理由をプロデューサー側は、開会式の内容について理解してもらったうえで「少しでも多くの人々に参加してもらうため」と説明している（浅利 [1998]、今野 [1998]）。

しかし、こうした方針は当然のことながらIOCやNAOC（長野オリンピック委員会）との間に軋轢を生じさせた（『朝日新聞』2月8日）。ここには、オリンピックの理念をめぐる注目すべき対立が見て取れる。官僚主義的にオリンピックの準備を進めようとするIOCやNAOCに対して、浅利たちプロデューサー集団は「公開」と「参加」を理念に掲げ抵抗を試みた。そこには同時に、近年しばしば指摘されるオリンピックにおけるコマーシャルリズムの高まりへの批判を見出すこともできる¹⁾。先に述べたように、秘密主義を徹底する裏には、テレビ放映を優先させるというコマーシャルリズムが厳として存在している。それに対して、開会式の内容を事前に公開しより多くの人々の理解と参加を促す姿勢には、アトランタ・オリンピックで指摘された過度の商業主義への批判を踏まえて、地味であっても手作りの開会式を作り上げようとする制作者側の意図が窺われる（浅利 [1998]）。そして結果的に、長野オリンピックの開会式が「簡素であった」ことに対しては、国内外を問わず多方面から一定程度の評価が下された（『朝日新聞』2月8日）。

このように実際の開会式開催に先立ち表面化したIOC/NAOC側と浅利たち制作者側との対立には、今日のオリンピックが直面する根本的な問題が表われている。「参加することに意義がある」との理念のもとで世界各国の友好を促進すべきはずのオリンピックは、現実には巨大組織に付きまとう官僚主義とスポンサー側から加えられる商業主義のプレッシャーのなかで、当初の理念からますます遠ざかりつつある。そのこと自体は、かなり前から指摘されていることであり、とりたてて目新しいものではない。しかし、長野オリンピッ

1) だからといって、長野オリンピックが商業主義にとらわれていなかったわけではない。それは立派な「商業化されたオリンピック」であった。ここで問題としたいことは、実際に商業主義化されていたか否かではなく、オリンピックにおけるコマーシャルリズムへの批判が、どのようなレトリックのもとで展開されたかである。つまり、「何の名のもとに」商業主義が批判されたのが、検討すべき重要なポイントである。

クに関して特徴的なことは、そうした官僚主義や商業主義への批判が、主催者側から内在的に提起されたことである。つまり、外部からではなく内部からオリンピックのあり方そのものへの批判が提示されたことが、興味深いのである。従来からの官僚主義と商業主義への批判を前提としつつ、「公開」と「参加」²⁾こそが現在のオリンピックを取り巻く諸問題を解決する処方箋として提起された。さらに、官僚主義や商業主義を極力排除することを目論んだプロデューサーたちの手による開会式では、「日本らしさ」がことさらに重視されたのである。

それでは、事前にその内容の多くが公開され、一般の人々の参加を呼び掛けた長野オリンピック開会式とは、実際にどのようなものだったのだろうか。

「日本らしさ」の演出

開会式の総合プロデューサーである浅利慶太によれば、長野オリンピック開会式の演出に際して三つのテーマを考えたという。それは「平和への祈り・世界との連帯・日本伝統文化の紹介」の三つである（『開会式プログラム』）。このなかでも、開催一年前の記者発表当初から注目を集めたのは、やはり「日本伝統文化の紹介」である。なぜなら、「平和への祈り」や「世界との連帯」がそもそものオリンピックの理念に照らし合わせて当然予想されるものであるのに対して、「日本伝統文化の紹介」には、開催国ならではの独自性が期待されたからである。

果たして当日の開会式では、大方の予想に反することなく「日本らしさ」がさまざまな意匠をこらして演出された。ここでは、そうした「日本らしさ」の演出について具体的に見ていくことにする。

開会式の進行はおおよそ以下のように行われた。

1. 善光寺の鐘の音によって、長野オリンピックの開幕が告げられる（会場の巨大なスクリーンに寺の鐘が映し出される）
2. 諏訪地方の伝統行事である「建御柱」の実演（スタジアム内に八本の御柱が建てられる）
3. 大相撲力士の土俵入り（会場中央に備え付けられた円形の空間を土俵に見立てて、化粧まわし姿の力士が入場）
4. 天皇・皇后の着席
5. 横綱曙の土俵入り（当初予定されていた貴乃花が体調不良で欠場のため、代わりに曙が「雲竜型」の土俵入りを披露）
6. 道祖神・雪ん子の入場（巨大な道祖神4体と、雪蓑をかぶり「雪ん子」に扮した子供150人が入場）
7. 子供たちによる平和を願う歌と踊り（参加各国の国旗をイメージした衣装を身にまとった子供たちが、歌手の森山良子が唱う開会式テーマソング『明日こそ、子供たちが・・・』に合わせて踊る）
8. 選手団入場（力士と子供がペアで先導役をつとめる。行進の際に流れる音楽は、日本各地の民謡をアレンジしたオリジナル曲『日本民謡によるパラフレーズ』）
9. 齋藤英四郎 NAOC 会長の挨拶
10. サマランチ IOC 会長の挨拶
11. 天皇による開会宣言
12. オリンピック旗入場・掲揚（過去の冬季オリンピックのメダリスト・入賞者8人がオリンピック旗を運ぶ）
13. 君が代の演奏（龍笛と笙による雅楽合唱）
14. 聖火の入場・点火（対人地雷廃絶活動家クリス・ムーンら6名の最終聖火ランナーが会場内を周回し、最後にアルバービルで銀メダルに輝いたフィギアスケートの伊藤みどりに聖火が手渡され、聖火台に点火）
15. 選手宣誓・審判員宣誓（選手宣誓はノルディック複合の萩原健司、審判員宣誓は平松純子）
16. 地球大合唱『歓喜の歌』（長野県民文化会館

2) オリンピックへの「一般の人々」の参加を促す代表的なものとして、長野県下の小学校において実施された「一校一国運動」があげられる。これは、各学校毎に担当する「長野五輪参加国」を一国ずつ決め、その国の文化や風習について学校ぐるみで学習していこうとするものである。こうした教育機関での取り組みに代表されるオリンピックに際しての「ボランティア活動」には、国家や行政の力を用いて人々を「動員」しようとする側面が否めない。長野県民のオリンピックへの「参加」の実態については、山中 [1998] を参照。

にいる小澤征爾の指揮に合わせ、世界五大陸の都市（ベルリン、シドニー、ニューヨーク、北京、ケープポイント）を衛星中継で繋いで同時に合唱。その模様は会場のスクリーンに映し出される）

このような順序で行われた開会式において、「日本らしさ」の演出が重要な位置を占めていることは誰の目にも明らかであろう。善光寺の鐘が厳かにつかれるシーンに始まり、勇壮な「建御柱」がスタジアムで実演され、それに引き続き、まわし姿の大相撲力士たちが入場する一連の行事は、まさに日本の伝統文化を世界に知らしめるものにほかならない。さらに、こうした「日本らしさ」の演出が、開催地である長野の伝統・民芸文化を用いることで遂行されている点も興味深い。「建御柱」であれ「道祖神」や「雪ん子」であれ、それらを用いて「日本の伝統」が表現される前提には、日本らしさ＝地方らしさ＝長野らしさという発想が容易に見て取れる。つまり、開会式での「日本らしさ」の演出において、ナショナルなもの（全国的なもの）とローカルなもの（地域的なもの）とは何ら矛盾することなく、きわめて予定調和的に描かれているのである。

ところで、こうした「日本らしさ」は、オリンピックそもそもの理念である「世界の友好と平和」へと有機的に繋がるかたちで演出されている。雪ん子たちが糞を取るとそこには各国の国旗をあしらった色鮮やかな衣装が現われ、森山良子が唱う『明日こそ、子供たちが・・・（When Children Rule the World）』（作曲は英国の著名なミュージカル演出家アンドリュー・ロイド＝ウェーバー）に合わせて踊る場面は、まさに子供たちを媒介にして「日本らしさ」が「世界」へと広がっていく象徴的なシーンである。「愛と参加」という長野オリンピックのメインテーマは、「平和な未来」の担い手である子供たちに託されるかたちで演出されるのである。

こうした「日本らしさ」の演出は、開会式の後半でも継続して試みられる。天皇による開会宣言を受けてオリンピック旗が掲揚され「君が代」（98年当時は「国歌」として法制度化されていないにもかかわらず、公式の開会式プログラムには「国歌」と表記されている）が演奏されるが、それは「龍笛と笙による雅楽合唱」という古典的な演奏法においてなされる。さらに、聖火ランナーが会場に入場し次々とリレーしていくが、最後の二人は共に女性（陸上の鈴木弘美とフィギアスケートの伊藤みどり）であった。観るものを驚かすほどに「古典的」な二人の衣装は、いやがうえにも人々の目をひいた。

鈴木が駆け上がっていく階段の先には、日の丸をイメージした紅白の扇が置かれている。彼女が近付くと扇が二つに割れ、その間から舞台が競り上がる。壇上には巫女姿の伊藤が立っている。浅利曰くこの衣装は「能の衣装をアレンジした」ものらしいが、それはほどことなく古代の女帝卑弥呼を彷彿とさせる。鈴木から聖火を手渡されると、伊藤はそれを恭しく聖火台に点火する。ここは開会式における最大の盛り上がりシーンであるが、それは日本神話の「天の岩屋戸」を人々に思い起こさせずにはおかない。こうした「日本らしさ」の過剰なまでの演出には、各方面から疑問や批判が表明されもした。

このように開会式の第一の特徴として指摘できることは、そこにおける「日本らしさ」の強調である。事前の情報公開からある程度予想されたことではあったが、浅利の手による開会式は、季節外れの力士の土俵入りまで敢行して、過剰なまでに日本の「伝統」を前面に出した。と同時に、開催地である長野地方の民衆・郷土芸能をふんだんに用いて、日本の「文化」の独自性と素晴らしさを世界の人々に伝えようとした。このように長野での開会式は、徹底して「日本らしさ」にこだわったのである³⁾。

3) 浅利が開会式の演出にあたって、当初から一貫して「日本らしさ」にこだわっていたことは、本人の口による次のような言葉からも明らかである（浅利 [1998]）。「本来開会式はその国の文化芸術の伝統の中で行うべきだというのが、近代オリンピックの父、クーベルタン男爵の考えだった。それがどこのオリンピックでも西欧型のお祭りになっている。果たしてそれでいいのかというのが私の疑問だ」、「日本には日本の味わいがあるいいのではないか。アジアの開会式は、アメリカ風にショーアップしない」、「相撲は夏とか冬とかの区別を超えて、

「世界」との繋がり

だが同時に、オリンピック開会式という場で表象された「日本らしさ」は、つねに「世界」と接点を持つものとして演出されてもいた。先に述べた子供たちの踊りの場面と並んで、そうした「世界との繋がり」が読み取れる場面は、意外にも最も「日本らしさ」が強烈に演出された聖火台への点火シーンである。古代の衣装に身を包んだ鈴木弘美から巫女姿の伊藤みどりへと聖火が手渡され、聖火台に灯火されるシーンで奏でられる音楽は、プッチーニの『ある晴れた日に』である。これは有名なオペラ『蝶々夫人』で用いられる曲である。この場面ですべて『ある晴れた日に』を使ったのかについて浅利自身は、『ある晴れた日に』というのは、東洋と西洋が会って、最も美しく幸福な瞬間を描いたものだから、と答えている（NHK『長野オリンピック 開会式スペシャル』2月7日放送）。つまり、「日本らしさ」を前面に出した聖火の点火シーンは、同時に東洋と西洋との出会い、別の言葉でいえば「日本」と「世界」との繋がりを暗示するものとして、位置づけられているのである。こうした「日本」と「世界」との関係は、それに続く「地球大合唱・歓喜の歌」においてより鮮明に打ち出される。

「地球大合唱」では、「世界のオザワ」こと小澤征爾がふるタクトのもと、五大大陸を結んでの大合唱が会場の観客をも巻き込むかたちで試みられた。スタジアムのスクリーンには長野の別会場で指揮する小澤の姿をはじめ、ベルリン、シドニー、ニューヨーク、北京、ケープポイントの各地における合唱団の姿が次々と映し出された。衛星中継を用いて合唱する際に障害となる各都市ごとの時差の問題は、最新のテクノロジーによって解消されたという。こうした日本が誇る高度な衛星放送技術のおかげで、大合唱の様子を眺める観客や私たち視聴者は、小澤の指揮のもとで、あたかも「世界が一つ」になったかのように実感することを期待されたのである。

およそ20分にも及ぶ「地球大合唱」は、開会式

の最後を飾る重要な部分である。しかし、ここでは不思議なまでに「日本らしさ」が背景に退いている。多くの人々の「参加」をモットーとする開会式らしく、会場に集まった5万人の観客たちも合唱に参加するよう「指導」されていたのであるが（小澤自身が開会式前に会場を訪れ、観客に歌の指導をした）、不思議なことにそこで唱われる『歓喜の歌』は原曲に忠実にドイツ語である（北京の合唱団が中国語で唱っていたのとは対照的である）。小澤も浅利も開会式終了後のインタビュー番組のなかで、会場の多くの観客がドイツ語で『第九』を唱っていたことを、とても誇らし気に語っていた（NHK『長野オリンピック 開会式スペシャル』）。

「地球大合唱」に先立つ場面においてあれほど「日本らしさ」が強調されていたにもかかわらず、開会式の最後の部分は、ことさらに「世界」（より具体的には欧米世界）を意識したかたちで締めくくられる。ここには、「日本らしさ」を主題としたはずの開会式の演出における、興味深い矛盾や対立が潜んでいるのではないだろうか。勿論、浅利自身の言葉を借りれば、「オザワ」という日本が生んだ天才音楽家が五大大陸にまたがる合唱団を指揮することで、「日本の素晴らしさ」を世界に伝えることができる。だから、『歓喜の歌』の大合唱は、開会式全体を通しての「日本らしさ」の称賛となら矛盾するものではないだろう。

しかしながら、開会式をテレビで視たものの多くは、いささか長すぎるとも思われる『歓喜の歌』を、ある種の戸惑いを持って聴いていたに違いない。現代の日本人にとって、道祖神や雅楽があまりに「伝統的すぎる」と同様に、ベートーベンのシンフォニー『第九』は、あまりに「西洋的すぎる」のではないだろうか。さらに、こうした両極端なものが同じ式典のなかで演出されることで、それを観る側は、何ともいいがたい居心地の悪さを禁じ得ない。

日本古来のスポーツである。古事記、日本書紀にもその記載がある。その伝統のスポーツマンによって開会の露を払いたい。～中略～ 小柄で眼鏡をかけ、カメラを体の正面に持っている戯画化された日本人。ヨーロッパでよく見かける図柄である。日本の文化伝統と日本人のイメージ、それを私は相撲に託した」

開会式演出の曖昧さ

以上見てきたように、長野オリンピックの開会式は一方で「日本らしさ」を声高に唱えながら、他方で「平和」や「連帯」という理念によって「世界と共にあること」の価値を表現しようとした。こうした二側面が同時に盛り込まれていた理由は、三つのテーマ「平和への祈り・世界との連帯・日本伝統文化の紹介」をなんら矛盾することなく整合的に演出できる、と主催者側が考えていたからにはほかならない。

しかしながら、観客／視聴者の目から見ると、そこに込められた二つの理念（ナショナルなもの／コスモポリタンなもの）がそう簡単に調和するとは思われない。別の言葉でいえば、演出する側の意図とは異なり、開会式を観る側は、そこにある種の矛盾や居心地の悪さを感じ取ってしまうのである。

より具体的にいえば、開会式では「日本らしさ」が前面に出されたのであるが、多くの人々にとってそこでの「日本らしさ」は、自分たちの日常に照らしてリアルなもの＝実感をもてるものではなかった。あまりに古典的なかたちで表現された「日本文化」は、私たちの多くにとって身近なものであるよりは、逆に「物珍しいもの」と映ったに違いない。つまり浅利によって描かれた「日本らしさ」は、あまり「らしくない」のである。

それと同時に、「世界」との結びつきを象徴するはずの『歓喜の歌』の大合唱にしても、どこことなく「場違い」と感じた視聴者は少なくなかったように思われる。たしかに『第九』は、歳末に日本各地で合唱されるほどに定着しているのだろうが、どうして冬季オリンピックの開会式で唱われねばならなかったのか。それも開催地の人々の母国語ではないドイツ語をもって。こうした疑問を抱くのは、きわめて自然なことであろう。ここにも「世界」との関わりを演出していくうえでの、ある種の「らしくなさ」が露呈している。

要するに「日本」と「世界」、「ナショナルなもの」と「コスモポリタンなもの」の双方の演出に

おいて、長野オリンピック開会式は曖昧であった。その結果、多くの人々は実感できる「らしさ」を、どちらにも感じ取れなかったのではないだろうか⁴⁾。実のところ、こうした曖昧さや中途半端さは、浅利たちプロデューサー集団の力量の問題というよりは、グローバル時代といわれる現代において「日本」と「世界」を同時に表象しようとする際に、不可避的に直面する問題である。その点については、本稿の最後で改めて論じる。

その前に、こうした「曖昧で中途半端な」開会式の演出が引き起こしたバッシングについて考えていくことにする。

3. 開会式へのバッシング：「恥ずかしさ」の裏にあるもの

意味不明な「日本らしさ」

「日本らしさ」を過剰なまでに演出した開会式に対しては、各方面から批判や疑問の声が上がった。それはあたかもバッシングとでも形容すべき事態であった。ただ、ここで注目すべきことは、こうしたバッシングが生じるであろうことを、浅利をはじめとするプロデューサー側が、ある程度予期していたように思われる点である。開会式終了後の記者会見で、浅利は「予想をはるかに超える出来栄で、感動が得られた」と開会式を自画自賛した。それに対して「日本色の強調が現代の日本像とずれていたのではないか」との質問がなされた際には、「ハイテクやジーンズだけが日本ではない」とキッパリと反論している（『信濃毎日新聞』2月8日）。こうした発言からも、浅利をはじめとするプロデューサー集団が、伝統的な「日本らしさ」を表現することを確信犯的に目論んでいたことが窺われる。そうであるならば、「伝統的すぎる」とか「日本にこだわりすぎでは」との批判や疑念が出るであろうことは、予め織り込み済みであったに違いない。

果たして開会式へのバッシングの多くは、こうした伝統的な「日本らしさ」の演出に集中した。

4) 浅井慎平の開会式評は、こうした感覚を端的に表わしている。「日本の伝統的なものの取り上げ方がうまくない。例えば力士たちの使い方。『フジヤマ・ゲイシャ』に代表される、ハリウッド映画が描く底の浅い日本のイメージを日本人自身が演じている感じ。見ていて辛かった。伝統も、新しいものもうまく取り入れられないでいる、現在の未熟な日本文化のありようをそのまま表したとも言える」『信濃毎日新聞』2月8日

そこに共通して見出される第一の論点は、開会式での「日本らしさ」が、外国人はおろか日本人自身にとっても「理解できない」ものだったという点である。例えば『諏訪の御柱』や『相撲の土俵入り』を立て続けに見せられて、それが日本である！と言われてもピンとこないんです日本人って」（松崎 [1998]）や「これでもかこれでもかと繰り返される時代錯誤（？）の日本趣味。～中略～ とにかくあの「開会式」は、日本国民、そして発信された世界の人々を驚かせたことは間違いない」（『週刊ポスト』2月27日）といった「日本らしさ」批判は、こうした論調の典型である。

バッシングに見出される第二の論点は、一方で「日本らしさ」を強調しながら、他方で『歓喜の歌』の大合唱に代表される世界＝西洋志向をあらわにしていたことへの、疑問や批判である。「〔ラストの大合唱では〕選手の姿が消えてしまっていた。それに、それまで日本の伝統芸能をやってきたにもかかわらず、突然、音楽番組になってしまい、日本で開催しているというイメージも希薄になってしまった」（映画監督・熊井啓『週刊宝石』2月26日）とか、「前半で伝統的、民俗的な要素を強調、後半をベートーベンで締めくくった構成は、絵にかいたような脱亜入欧のパターンである。これでは木遣りも、土俵入りも道祖神の踊りもアホの楽しむもの、最後は何と言ってもヨーロッパに限り、と言うのと同じである」（鈴森 [1998]）といった辛辣な批判は、開会式における「日本らしさ」の不徹底や底の浅さを的確に指摘している。

このように、本人の自画自賛にもかかわらず浅利演出による開会式は、「日本らしさ」の表象をめぐり大いに物議を醸した。こうした開会式への疑念や批判は、一部の識者や関係者だけでなくヨリ多くの観客／視聴者にも共通して抱かれていたように思われる。そうした感情を端的に表わしたのが『「恥ずかしすぎる」開会式 これがいまの『日本』だとしたら時代錯誤もはなはだしいのでは』という週刊誌の特集記事のタイトルであろう（『週刊ポスト』2月27日）。

要するに、オリンピック開会式という国際的な舞台で、日本人自身にもよく分らない「伝統文化」によって「日本」が世界に紹介されたこと

を、多くの人々は「恥ずかしい」と感じたのである。そうした集合的な感情が、開会式演出へのバッシング報道を引き起こす土壌として存在していた。つまり、中途半端で意味不明な「日本らしさ」が、欧米へのコンプレックスをいまだ拭いきれないかたちで世界に向けて発信される様を開会式に見て取り、日本人の多くは「恥ずかしさ」と「情けなさ」を感じたのである。

それでは、こうした「恥ずかしさ」の原因はどこに求められたのだろうか。別の言葉でいえば、「恥ずかしくない」日本の自己発信は、どうしたら可能だと考えられていたのであろうか。さまざまなバッシングに共通する第三の論点が、ここに指摘できる。それは「世代感覚の違い」に対する批判である。

『開会式がヘンだったわけ』というエッセイのなかで戯作者の松崎菊也は、「浅利氏の権威主義は『雅楽の君が代』から『紅白の扇から出てくる能の衣装もどき』の伊藤みどりに繋がって、とうとう『世界のオザワ』に行き着くのでした。つまり、現在の若者がポッカリ抜け落ちているじゃありませんか。そういう連中のやっていることは文化などという高尚なものではない！みたいな傲慢な権威主義がヘンな開会式になった理由です」と分析している（松崎 [1998]）。

このように開会式の問題点として、「伝統の日本」ばかりで「現代の日本」が欠落している点を指摘する論者は少なくない。テレビ番組のディレクターであるテリー伊藤の「世紀末を生きる若い人の現状も最先端のハイテク事情も、全然分かってないんだよ。～中略～ ホンダやソニーが所有する驚異的にリアルな動きをするハイテクロボットを、全世界30億人の人々に見せびらかすのも良かったかもしれないしな」（『週刊ポスト』2月27日）との意見や、「扇に日の丸だったり、関取を冬の長野にひっぱってくる。日本といえばフジヤマ、ゲイシャといわれていた時代の感じですね。浅利慶太さんの年齢がモロに出てしまいましたね。～中略～ それに音楽だって第九ですよ。日本にもいいミュージシャンが育っているんだから、リズム感のある音楽を紹介できるのに、情けないですよ。もっと若い人に演出させた方が良かった」（『週刊新潮』2月5日）と嘆く若手演出

家の発言などは、開会式において「現代の日本」が決定的に欠落していた点を指摘している。こうした言説に共通しているのは、プロデュースに携わった浅利たち60歳代の世代感覚が現代の日本から絶望的なまでにズレていたことに、オリンピック開会式の「失敗」の原因を見出す立場である。

このように世代感覚のズレに「恥ずかしさ」の原因を求める発想は、「恥ずかしくない」自己発信は若い世代の感覚で「日本らしさ」を表現することで可能になる、との考えとセットになっている。先にみたように、テリー伊藤が「ホンダやソニーのハイテックロボット」に言及したり、若手演出家が「もっと若い人に演出させた方が良い」と主張する背景には、「現代の日本」こそが「恥ずかしくない日本」であるとする素朴な発想が見取れる。さらに松崎に至っては、「浅利氏が依頼した子供の歌の作曲家がどんなに『有名なボクの友人のミュージカル作曲家』であるか知らんが、小室哲哉じゃいかんかったのかね？ 森山良子にゃ悪いが、どうして安室奈美恵に歌わせなかったのかね」と、「ヘンでない」開会式でありえた可能性を具体的に模索している⁵⁾。

これらの発言から明らかなように、バッシングの鋒先は、浅利に代表される「古い世代」の感覚で「日本らしさ」が演出されたことに向けられていた。ハイテックやJポップといった「現代の日本」がオリンピック開会式においてなら描かれていなかったことに、多くの人々は戸惑いと苛立ちを感じた。そして、あまりに「伝統的な日本」だけが世界に向けて発信されたことを、「恥ずかしすぎる」と感じたのである。

バッシングの真意：「ナショナルなもの」への欲望

以上見てきたように、開会式に対するメディアのバッシングに共通して聴き取れる通奏低音は、多くの人々に共有された「恥ずかしい」との感情に訴えかけるかたちで、「日本らしさ」の描かれ方の「古臭さ」や「中途半端さ」を批判し、揶揄するものであった。その点では、浅利たちプロ

デューサー集団が三つのテーマのひとつに掲げた「日本の伝統文化の紹介」は、国外に対してはおろか国内においても、さほど支持されなかったと判断することができよう。皮肉なことに「ハイテックとジーンズだけが日本文化ではない」との浅利の信念とは逆に、「ハイテックやジーンズ」に代表される今の日本文化が表象されていなければ、多くの人々は「日本らしさ」を実感できないのである。

このように考えると、過剰なまでに「日本らしさ」の演出に固執した開会式は、結果的に「失敗」であったかのように思われる。実際、そのように開会式を評価する論調は、先に挙げたバッシングをはじめ少なくなかった。

しかしながら、オリンピックというメディア・イベント／ナショナル・イベントを通じてどのように「ナショナルなもの」が表象されるのかという本稿の問題関心に照らしてみた場合に、浅利の演出による開会式は必ずしも「失敗」であったとは思われない。その理由は、バッシングに共通して見出される第三の論点として指摘した「世代感覚のズレ」として開会式を批判する論調が典型的に示しているように、バッシングする側もある点では主催者側と同様に、オリンピックという国際的な舞台で「日本らしさ」を表象する必要性を痛感していたからである。つまり、バッシングの対象とされたのは「日本らしさ」をめぐる演出の技法／表象の仕方であって、「日本らしさ」そのものに対する根本的な批判は、ほとんど見られなかった⁶⁾。浅利や小澤を揶揄する人々もなかば暗黙のうちに、「日本らしさ」を表現することが大切だと考えていた。だからこそ、「恥ずかしすぎる」といった人々の情緒に訴える言葉でもって、開会式へのバッシングがなされたのである。

こうした点を踏まえると、各方面から出された開会式へのバッシングは、期せずして二重の作用を果たしたように思われる。第一に、開会式のなかで描き出された「伝統的な日本」が「現代の日本」に照らして甚だおかしなものであることを暴

5) 興味深いことに、この時点では放言に過ぎなかった小室・安室のコンビで「日本らしさ」を演出するという松崎の案は、その後2000年7月に開催された「沖縄サミット」において現実のものとなった。

6) 例外としては、成熟した消費社会は「スポーツを通じたナショナリズムの高揚を卒業」すべきだと主張した浅田 [1998] の論考があげられる。

き出すことで、そうした「日本らしさ」を演出した「権威主義的な古い世代」を嘲笑った。さらに第二の作用として、そのような「日本らしさ」が世界に発信されてしまったことを「恥ずかしい」と感じさせることによって、「世界」に向けて「今の日本」を知らしめる必要があることを、より多くの人々に改めて認識させました。こうした二重の作用によって、「日本らしさ＝ナショナルなもの」の重要性が、きわめて自然なかたちで人々に受け入れられていった。

このように考えると、「日本らしさ」を過剰なまでに「伝統」として描き出そうとした浅利たちプロデューサーの試みは、激しいバッシングを引き起こすことで「伝統」を犠牲にしたものの、肝心の「日本らしさ」の重要性を人々に伝える点では、結果的に成功したといえる。その意味で、「予想をはるかに超える出来栄だった」との浅利の自画自賛も、あながち的外れではなかった。

以上、開会式に対してどのような批判や疑問が投げかけられたかを具体的に見ていくなかで、浅利の演出に対するバッシングが、結果的にどのような作用を果たしたのかを考えてきた。たしかに、「日本らしさ」をメインテーマとして開催された開会式は、さまざまなバッシングを引き起こした。しかしながら、そうした批判は、現代のオリンピックがメディア・イベントであると同時にナショナル・イベントであり、そこでは「ナショナルなもの」の表象が中心的な位置を占めるという暗黙の大前提を揺るがすものではなかった。むしろ逆に、「世界」に向けてどのように「ナショナルなもの」を表象するかが今の日本にとって大きな課題であることを、バッシング報道は期せずして人々に訴えたのである。

だが、どうして「ナショナルなもの」の表象が、現代の日本にとって課題なのだろうか。最終節では、長野オリンピック以後の日本社会の政治・社会の動向も踏まえつつ、その点について考えていく。

4. グローバル化のなかの「ナショナルなもの」のゆくえ

「日本らしさ」をめぐる90年代の動向：「ナショナルなもの」の復興

これまでみてきたように、長野オリンピックの開会式では、いかにして「日本らしさ」を世界に伝えるかが重要なテーマとして位置づけられていた。冒頭にも述べたように、オリンピックというメディア・イベント／ナショナル・イベントを通じた「表象のポリティクス」は、その時代や社会の姿を表わしている。だとすれば、「日本らしさ」の表象がことさらに試みられる社会の姿とは、いったいどのようなものなのだろうか。ここでは、オリンピック以後の「ナショナルなもの」をめぐる政治・文化の動向を踏まえながら、その点について考えていく。

長野オリンピック以後の90年代後半において、「ナショナルなもの」は政治の舞台において中心的なアジェンダ（議題）として浮上するに至った。具体事例としては、99年夏の第145通常国会において、「国旗・国歌法」「周辺事態法（日米ガイドライン法）」「通信傍受法」「改正住民基本台帳法」が矢継ぎばやに可決されたことがあげられる。これらの法案はいずれも、「国家」の権限をより強力にしようとする点で共通していた。

とりわけ、日の丸を国旗に君が代を国歌に法制度化する「日の丸・君が代」法案の成立は、現在の日本における「ナショナルなもの」のあり方を象徴的に表わしている（石田・鶴飼・坂元・西谷 [1999]、田中 [2000]、藤田 [1999]）。そこには、国旗・国歌というシンボルを用いて「国民」を動員・統合し、「国家」を強靱なものにしようとする為政者側の意図が見て取れる。別の言葉でいえば、それは「ナショナルなもの」を政治レベルにおいて積極的に表象しようとする試みである。その点で「日の丸・君が代」法案とは、国家とは何か／国民とは誰かという「ナショナルなもの」をめぐる問いに対して、きわめて保守的なかたちで解答を与えたものにはかならない。つまり、「日の丸・君が代」に象徴されるもの（過去の歴史との連続における「象徴天皇制」）こそが「国家」

の核をなすものであり、そうした上から与えられる「国家＝国体」に忠誠を誓う人々こそが「国民」だとされる。逆にいえば、「日の丸・君が代」を拒否するものは「非国民」と看做されるのである。こうした意図と作用を持つ「日の丸・君が代」法案によって象徴される「ナショナルなもの」が偏狭で排他的な性格を持つことは、いまさら改めて指摘するまでもないだろう。

こうした政治の場で顕在化した「ナショナルなもの」をめぐる動向は、ポピュラー・カルチャーの位相においても同様な動きを伴っていた。そうした傾向を象徴するものとして、漫画家小林よしのりによる『戦争論』が、98年に空前のヒットを記録したことがあげられる。『戦争論』では「自虐史観」ととらわれない「自由主義史観」の立場から、日本による過去の戦争の歴史が正当化される。そこでの歴史記述は、単に過去を「修正」することに留まるのではなく、現代を生きる人々（とりわけ若年層）に対して「日本人であること」の自負を保証するものである。つまり、『戦争論』を読むことで人々は、これまでのような負い目や罪の意識ではなく、誇りと自信を持って「日本人であること」を受け入れられるようになる。こうしたセラピー効果を持つ『戦争論』が広範な支持を得た背景には、ヨリ肯定的に「ナショナルなもの」を感じ取りたいと欲する人々の情動が見て取れる。

もちろん、「ナショナルなもの」をめぐる政治の動きとポピュラー・カルチャーの動きはそれぞれ独立しており、どちらか一方を他方に還元できるものではない。しかし、98年以降の日本社会において、政治と文化の両面で「ナショナルなもの」が重要なイシューとして取り沙汰されたことの意義は決して小さくない。強権的なかたちで「国家のあり方」を構想し、晴れがましいものとして「国民のあり方」を想像することは、オリンピック開会式をめぐるパッシングを通じてはからずも明らかとなった「恥ずかしくない日本」を求める人々の欲望と、どこかで繋がっているに違いない。

「新たなナショナリズム」を超えて：オリンピック理念の可能性

小林よしのり『戦争論』や西尾幹二『国民の歴史』に典型的な力強く／誇らしげに／独善的に「日本らしさ」を讃える言説は、現代の日本において少なからぬ人々をひきつけている。そこには、かつての軍事的ナショナリズムとは様相を異にする「新たなナショナリズム」の高まりが指摘できる。「新たなナショナリズム」は、政治的・軍事的というよりも文化的・民族的なレトリックを用いて「日本らしさ」を打ち立てようとしている。単純化していえば、そこで追い求められているのは、誇りを持って世界に示すことができる「日本らしさ」＝ナショナル・アイデンティティにほかならない。そこには、グローバル化の荒波に曝されている現代において、それに圧倒され吸収されることなく、「気概」を持って他国に太刀打ちしていける国家・国民を創造しようとする、あからさまにナショナルな欲望が見出される。

こうした「ナショナルなもの」の復興は、なにも日本だけの社会・文化現象ではない。グローバル化が進行する現代世界において、さまざまなかたちでそうした「復興」が現われている。その意味で、一見したところの印象とは異なり、グローバル化の高まりとナショナリズムの復活とは、対立的ではなく相補的な関係にある。つまり、グローバル化が声高に叫ばれ推進される現代だからこそ、同時に「ナショナルなもの」への熱狂や倒錯も広まっていくのである。「ナショナルなもの」の復興は、グローバル化する現代世界が直面する不可避の現象といえる。

だが、戦争と紛争の20世紀を振り返るとき、「ナショナルなもの」が引き起こした暴力や悲惨には、筆舌につくし難いものがある。自己欺瞞的かつ自己愛的に「強い国家」や「輝ける国民」を理想として追い求めるナショナルな欲望は、結局は他の国家／国民とのあいだで仮借なき戦争を巻き起こす。この冷徹な現実を、私たちは20世紀を通じて幾度となく目の当たりにしてきた。

そうであるならば、これからの課題は、いたずらに「ナショナルなもの」の復古を目指すのではなく、手放して「グローバルなもの」を礼讃するのではなく、いかなる形態であれナショナリズムに不可避的に潜む根本的な排除／差別の構造を十分に認識したうえで、「ナショナルなもの」が孕む暴力

を少しでも軽減すべく努力していくことではないだろうか。そこにこそ、「ナショナルなもの」を超えた社会を作り上げていく想像力／創造力が潜んでいるに違いない。

長野オリンピック開会式で典型的に示され、その後も日本における「ナショナルなもの」をめぐる議論を規定し続けている思考様式は、「ナショナルなもの＝日本らしさ」をまず肯定的に措定したうえで、火急の現実問題であるグローバル化への対応を講じようとする⁷⁾。だがそこでは、当然のごとく「ナショナルなもの」自体の暴力性は隠蔽されてしまう。

こうした欺瞞に対抗すべく、いまだ見果てぬ理念である「コスモポリタニズム」の視座から現実の「ナショナルなもの」を捉え直すことができれば、「日本らしさ」に潜む排他性や暴力性は自ずと明らかとなるに違いない。そうした方向に向けた「表象のポリティクス」が実践されるときにはじめて、オリンピックという饗宴の場は、自らが掲げる崇高な理念の実現に向けた新たな一歩を踏み出すであろう。

引用文献

- 相川俊英 [1998]、やめたらどうだ「醜聞」五輪、『新潮45』3月号、98-107。
 浅田彰 [1998]、長野五輪にみる自閉した日本文化、『Voice』4月号、56-57。
 浅利慶太 [1998]、わたしの月間日記 長野オリンピック演出日記、『文芸春秋』3月号、268-281。
 阿部潔 [2000]、シドニー五輪が問いかけるもの、『朝日新聞』9月29日(夕刊)
 石田英敬・鶴飼哲・坂元ひろ子・西谷修 [1999]、『日の丸・君が代』を超えて』、岩波ブックレット
 小澤征爾 [1998]、僕が長野五輪に肩入れする理由、『現代』3月号、124-125。
 桂英史 [1998]、テレビが伝える「世界」のスケール、『朝日新聞』2月12日(夕刊)
 今野勉 [1998]、長野オリンピック開・閉会式の“秘密”、『新・調査情報』No. 9. 4-5。
 鈴森髑髏 [1998]、電波狼藉 愚劣な「開会式」のアホ

- 顔中継、『新潮45』3月号、88-89。
 高橋哲哉 [1999]、『戦後責任論』、講談社
 田中伸尚 [2000]、『日の丸・君が代の戦後史』、岩波新書
 谷口源太郎 [1998]、オリンピック神話に縛られたマスコミの原罪、『創』3月号、106-112。
 藤田卓(編)『公論よ起これ!「日の丸・君が代」』太郎次郎社
 松崎菊也 [1998]、開会式がへんだったわけ 松崎菊也の虫メガネ15、『週刊金曜日』2月20日号、33。
 山中登志子 [1998]、もうひとつの五輪観戦 我慢、がまんの市民生活、『週刊金曜日』2月20日号、52-53。
 Spa, Miquel de M., Rivenburg, Nancy K., Larson, James F. 1995, *Television in the Olympics*, London: John Libbey

7) 加藤典洋の『敗戦後論』の基本的な発想も、ここで指摘する「ナショナルなもの(謝罪する日本国民)」をまず最初に措定したうえで、「グローバルな課題(アジア諸国との共生)」の解決を探ろうとするものである。高橋哲哉 [1999] が指摘しているように、こうした加藤の言説においては「ナショナルなもの」自体の暴力性が巧妙に隠蔽されてしまう。

Mediated Sports Events and the Politics of Nationalism: Representations of 'Japanese-ness' in the 1998 Nagano Olympic Games

ABSTRACT

In the 1998 Nagano Olympic Games, the opening ceremony was very unique in that Asari Keita, who was the chief executive producer of the ceremony, tried to represent 'Japanese-ness' through traditional customs and rituals. Several people criticized and mocked this extraordinary image of Japan. To many Japanese people, the 'Japanese-ness' that was visualized by Asari seemed to be outdated and too traditional.

However, there was some sort of common feeling that 'we, Japanese' have to let the world know what Japan is in a more positive way. In other words, we could see the pervasive desire to be proud of 'Japanese-ness' in a way different from Asari's.

This shows the typical atmosphere surrounding contemporary nationalism. The basic driving force of contemporary nationalism resides in the cultural rather than the political sphere. Mediated sports events like the Olympic games are the very sites in which such a nationalistic mentality becomes visible and contested.

In this paper, I scrutinize the opening ceremony of the Nagano Olympic Games and the media discourses on the ceremony. Through that, I would like to shed light on the process that produces and reproduces nationalistic pride on 'Japan' in the late 1990 s.

Key Words: Olympic games, Mediated sports events, Nationalism